

各関係機関・団体長 様

愛媛県病害虫防除所長

病害虫防除技術情報（第 1 号）の送付について

このことについて、次のとおりお知らせしますので、御参照の上、防除指導方よろしく願いいたします。

記

1 情報の内容 麦類赤かび病の防除の徹底について

2 発生要因の現状

- (1) 第一次伝染源となる子のう胞子の飛散は、3 月第 5 半旬～第 6 半旬は平年よりも少なく経過したが、4 月第 1 半旬には気温の上昇により増加傾向にある（表 1）。
- (2) 播種期が長引いた地域では、出穂・開花のほ場間差が大きくなっている。なお、裸麦の開花期は出穂の 7～10 日後頃である（表 2）。
- (3) 1 か月予報（3 月 31 日 高松气象台発表、4 月 2 日～5 月 1 日）では、気温は高く、降水量は多い見込みであることから、発病には助長的である。特に、裸麦の開花期にあたる期間の前半は気温が高く、雨の降る日が多いとされており、発病が増加する恐れがある。

表 1 麦類赤かび病菌の子のう胞子飛散状況

		3 月			4 月
		第 4 半旬	第 5 半旬	第 6 半旬	第 1 半旬 ※
松山市上難波	平成 28 年	60	25	20	80
	平 年	26.9	23.0	39.2	24.5
西条市丹原	平成 28 年	13	7	7	14
	平 年	15.8	15.4	17.7	24.1

（単位：カバーガラス 1.8cm×1.8cm×2 枚分の胞子個数）、

※4 月第 1 半旬の数値は松山市は 4 日まで、西条市は 3 日までの合計値。

注）明日山考案による胞子採集器を麦栽培圃場内に設置。

平年値は平成 18～27 年の平均値。西条市は 18 年～19 年は小松町、20 年～27 年は丹原町設置。

◎子のう胞子飛散状況は病害虫防除所ホームページの「調査データ」にて随時更新しています。

表 2 マンネンボシの出穂・開花期予測

平成 28 年 4 月 4 日基準

播種日	出穂期	開花期
		(気温が平年並～高温に推移した場合)
1 1 / 1	3 / 2 1	3 / 2 8 ~ 4 / 1
1 1 / 1 0	3 / 2 5	4 / 2 ~ 4 / 5
1 1 / 2 0	3 / 2 9	4 / 5 ~ 4 / 9
1 2 / 1	4 / 2	4 / 9 ~ 4 / 1 3
1 2 / 1 0	4 / 7	4 / 1 4 ~ 4 / 1 8
平年値 (1 1 / 2 0)	4 / 4	

- ・農林水産研究所出穂予測システムでの計算
- ・平年値（平成 22～26 年奨励試験平均）

### 3 防除上の注意

- (1) 本病が最も感染（第一次感染）しやすい時期は、裸麦、小麦ともに開花期～開花 10 日頃である。この時期に子う胞子の飛散量が増加し、降雨と温暖条件が連続すると感染・発病が増加する。
- (2) 赤かび病の防除は適期を逃がさず実施することが重要であり、防除適期に降雨が多い場合でも、短い晴れ間を利用して確実に防除を行うことが重要である。裸麦、小麦の防除適期は開花期であり、その後、気温が高く降雨が続くようであれば 1 回目の防除から 7～10 日後に追加防除を実施する。
- (3) 防除薬剤は、トップジンM剤、ワークアップ剤、シルバキュア剤等を使用する。これら薬剤は、カビ毒(DON 等)の含有濃度を低減する効果が高い。
- (4) 薬剤散布に当たっては使用基準を遵守し、周辺作物に飛散しないよう注意する。なお、トップジンM粉剤 DL、同水和剤は、麦類（小麦を除く）では出穂期以降 1 回以内、小麦で出穂期以降 2 回以内の使用となっているので使用回数に注意する（スミトップ粉剤は総回数 1 回）。
- (5) 耕種的防除は、刈取り時期を可能な限り早め、収穫物をすみやかに乾かすことが有効である。また、倒伏は発病を助長するので倒伏させない栽培管理を行うことが重要である。

#### － 赤かび病の発生傾向－

- (1) 本県では、過去の多発年の気象経過から、開花期以降の日平均気温が17℃以上で降雨を伴う日が連続すると発病が増加し、さらに乳熟期以降も高温多雨条件の年に多発している。
- (2) 赤かび病の発生と出穂期前後の気象は重要な関係があり、多発年の年はムギの出穂期以降の平均気温が18～20℃を越え、湿度も80%以上が3日以上続く場合、あるいは降雨又は濃霧頻度が高い（日照時間が少ない）場合である。
- (3) 一般にムギの出穂が遅れることは、梅雨期に遭遇する公算が多くなり、発生が多くなる傾向がある。
- (4) 本病の第一次発生源である子う胞子の殻形成が盛んになるのは、日平均気温で13℃以上、降雨のあった直後であり、子う胞子の飛散が盛んになるのは、日最高気温で15℃以上、日最低気温が10℃以上で、湿度80%以上か降雨直後である。子う胞子の殻形成と子う胞子の飛散とはおおむね同傾向を示すから、気象調査と平行してこの調査を行い予察に利用する。

発生予察事業の調査実施基準（農林水産省植物防疫課）等より作成